



# 京鹿子

京都府立総合資料館  
京鹿子



6月号

鈴 鹿 呂 仁  
拾 掬 集 其 の 二 十 一

隴 夜 の 夫 に あ づ け る 角 ひ と つ  
世 を 疎 む 胡 越 の 空 は 霾 ぐ も り  
留 守 番 は て る て る 坊 主 海 道 忌  
小 満 や 地<sup>ほ</sup> 球<sup>し</sup> に 歪 な 齧 齒 類  
花 虻 の 影 の ひ と つ を 疎 ん じ る  
の そ つ と 来 き り ん の 口 舌 園 薄 暑



端くれの肥満の金魚老舗宿  
大器への入口四つ芒種の日  
鍵穴の向かう瀑布の遊行人  
蜘蛛の囿や有料回線行き詰まる  
白山吹神意ひとつを零しをり  
まつのをの御井みの清まし水みず濃山吹  
神さぶる松尾七谷みどり濃し  
磐座や寄らば小滝のもらひ水

—近詠—

鈴鹿 仁

初蝶

囀りの空まつさらに華頂山 (知恩院)

悦びの中の喜び初蝶舞ふ (〃)

女神像眉に秘めやか春愁ひ (松尾大社)

—追懷— (その三十一)

神言や結び目堅し笹粽 (平成十二年作)

通し鴨伊吹の風を円く受く (平成十二年作)



近詠

和田 照海

勾鳥

まらうどに鼻緒のゆるき花の寺

芽木の鳥つべこべ鳴いて平家谷

峰雲の韋駄天走り里桜

花山の玄武は固き磐岩

十方の檀那寺とや勾鳥



# 英華採集

春立つや原稿用紙の梯きはしに

吹 田 吉 田 孝 江

原稿用紙に綴られるであろう作者の思い・感情というものが、柵目に埋まる文字の一つ一つに命を宿すかのように生まれてくる。原稿用紙の四角い柵目の所々をミステリアスに選り、階段上に組み立てていくと、ある物語の世界へと導かれていくのである。その階段こそが、春に近づくプロムナードと言えるであろう。

窓際の本のあくびや春の昼

宇 治 岡 村 啓 子

のどかさを通り越して気怠い春の昼下がりに。何をすることもなく机の上に頬杖を付き何度も欠伸を繰り返している内に、窓際に並んでいる本がこちらを見ている錯覚に陥る。本の欠伸は、作者の分身となつて自分自身を見ているのである。アンニュイな春の時間がゆるやかに流れている。今の気忙しい世の中を風刺している。

植木鉢丸ければ蝶丸く舞ふ

大 津 岡 本 探 魚

春に生まれたばかりの蝶は、好奇心が旺盛である。高く跳んだかと思えば低空飛行を繰り返している。蝶に生まれた喜びを噛みしめているのかも知れない。掲句は、作者の庭に遊びに来た蝶が、無数の小花を咲かせた植木鉢の上を所狭しと飛び回っている。「鉢丸ければ丸く舞ふ」の措辞は、遊びに来てくれた作者の嬉しさを雄弁に語っている。

松本 鷹根

花 蕾 む

朱の橋に光琳の梅影のぼす

神籬に芯真直ぐな芽吹きあり

比良春雪称へて競ふ湖と空

淡く置く富士の遠嶺に浅蜷掘る

花蕾む仏心辿り和順句座



## 近 詠

春の鴨

首伸べて遠目をきかす春の鴨

うららかや雄鳥二羽を従へて

群鴨や人退けば迫り来る

望郷の瞳は空のいろ鴨の陣

残る鴨別れゆく鴨湖平ら

塩貝 朱千



神麓集

花おぼろ 藤岡紫水

零れ落つ旅の情(なさけ)や春愁  
松花粉風の軽さに煙りをり  
あさひるをせかせ夕べの花おぼろ  
水ありて一枝を映す初櫻  
パンジーのほたり音なき風流る

夏の月 沼田巴字

一枚の透明にして瀑布なる  
鯉け絵の屏風立てたり天満祭  
街薄薯世の商ひの変りやう  
街角に消えゆく人や夏の月  
青柿や父といふ名をもう呼べず

鞦 丸井巴水

正夢となる啓蟄の午後は晴  
鞦韆の加速夕日を蹴り上ぐる  
桜舞ふ阿形金剛息吸はず  
観音の裸足の半歩さくらいろ  
羊羹を重たく切つて花疲れ

一系 植村蘇星

一系になびき不変の水仙忌  
句は心俳味豊かな水仙忌  
九十九折りなりし古里春の泥  
日射し濃き春泥ほのと匂ひ立つ  
剽軽な話題展開春隣


水仙忌 北川孝子

深追ひの一語さらりと椿落つ  
胸になほおもかげの生き水仙忌  
ざわめきを芽吹き音と稲荷山  
反省の積もる抽出春しぐれ  
人の世の喜怒遠去けて山かすむ

白鳥 直江裕子

芹の青根つこの先までがふるさと  
人寄ればまんぢゆう怖い二月かな  
老人の恋ゆるされる春の宵  
ぼぼぴー少女が溺れ鳥溺れ  
白鳥のあらぬ声する有事かな





神麓集

足してゆく

高木晶子

春キヤベツ小声で誘ふ小旅行  
雛壇に足してゆく色これからの  
欠落の昔補ふ苺菓子  
水仙の所を得しとして匂ふ  
細枝の一本立ちの雨水の日

四温の道

伊藤希眸

肋までくれなゐにせり風二月  
梅咲くや「楓橋夜泊」の墨かすれ  
沈丁の蕾不足のない暮し  
白魚買ふがばりと掬ふ水の量  
三寒に掛布四温の道を掃く

擬似冬眠

木戸渥子

春告げ鳥お局さまには逆らはず  
少し食べ少し動いて擬似冬眠  
雪を被て亡母の巨きな漬物石  
あめ玉がなかなか溶けぬ目借時  
花筵に大の字嬰の二重あご

プラネタリウム

奥田筆子

寝てしまふプラネタリウム出れば雪  
摒ばかりの局面であり雪しまく  
時計草渦の二つは膝小僧  
わたくしはわたしのふあん雪が降る  
枯木山白亜不時着焼却場

雪の果

井上菜摘子

壊れるから好きシヤボン玉すきなだけ  
蝶図鑑埃はらへば翅音して  
子の居りし音二階から春しぐれ  
局留の真相ふきのたう閑ける  
借りし胸また一つ消ゆ雪の果

春シヨール

村田あを衣

犬ふぐり描けばいつしか星座組む  
裸婦像の翳りは光り春きざす  
一願の絵馬重ね合ひさくら東風  
春愁の奥へ奥へと女坂  
春シヨール夢二館の待ち合せ



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

春立つや原稿用紙の梯きざましに

行き止まり白梅覗く油塀

螢鳥賊一網打尽のアラビア文字

六腑突く水仙の香の一直線

窓際の本のあくびや春の昼

亀鳴くや老化防止のトレーニング

パンを焼くオーブンの音春の昼

完走の市民マラソン春の風

植木鉢丸ければ蝶丸く舞ふ

梅古木瀬田の流れは淀に向く

吹田吉田孝江

宇治岡村啓子

大津岡本探魚

糸柳欄干の無き行者橋

先斗町午後の三時の春余白

日本から菓子が届きて茶の二月

娘の絵文字緊張の解く冬いちご

鞆鞭や楽譜を繰りし父と子と

黄水仙受賞の紳士寡黙なり

久久の青空澄みて雪いづこ

冬ぬくし白き眺めは又緑

白き空もうすぐ雪の降る予感

年流る想ひは遠き日本の子

アリソナ 伊吹之博

オハイオ 水谷直子

里の子のこつを覚えしいかのぼり  
せゝらぎのハミング始む春の風

札 幌 野村 鞆枝

語り部のなまりやさしき雪の宿  
一人居の細めに開けて鬼やらひ

酒 田 藤波 松山

春の雪フロントガラス濡らすだけ  
紅梅の枝折りポケットほつこりと

コップ梅蓄ほころび気も晴れり

春の猫ふらつき歩く裏通り

北口に待ちつづけるや初燕  
波 川 東 秋茄子

古雛の行く先寂し家離れ

白酒をしのばすやうに供へけり

卒業入学を知らせる亡き主に

春めくや嬰兒熟睡ベビーカー  
さいたま 神田 惣介

愛犬も難聴となり虎落笛

春めくや街頭芸人軽やかに

垣根越え挨拶交す寒の明け

啓蛰や道路工事の立看板  
戸 田 遠山 悟史

晴れ舞台里子になりし古き雛

梅が香やますます遠き母の耳

靴紐を結び直して青き踏む

玄関の灯をつけて出る沈丁花  
千 葉 高野 春子

さよならを両手で返す春時雨

霾やをとこの低き巡礼歌  
信号の赤の点滅花おぼろ

初島へ冬晴れの富士曳き行けり  
布川 孝子

また来ようね氏神様の梅の道

型録の春のコートに一目ぼれ

少年のひとりサッカー日脚伸ぶ

雛飾る妣の句帳のセピア色  
松 戸 岡山 敦子

恋猫や夫は知らない頬の剃り

一雨に庭隅ほのと山椒の芽

白梅に続く紅梅宴かな

春吊すやうに洗濯ばさみかな  
習志野 上野 紫泉

この扉押さうか引くか二月尽

木もれ日を蝶一頭の翅にのせ

朝やけを使ひきりたり鳥帰る

湧水の縁は早くも下萌ゆる  
船 橋 元橋 孝之

下萌えて十九の青喜寿は銀

造語盛り由来は梵語いぬぶぐり

春の野のいづれ此の道杖頼り

立春のパン跳びあがるトースター  
金子 正道

芽柳や水ほとぼせるダム壁

雛あられ熊手のやうに手を伸ばす

年一度出向く税務署黄水仙